

2024年8月31日（土）

老球の細道825号

8月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

映画『東京物語』で笠智衆が尾道の港を見ながらつぶやく「ああ、きょうも、暑くなるぞ」を思い起こさせる暑い日が続いた。「夏は暑い、冬は寒い、蚊に刺されれば痒い。あたりまえのことを気にするな」とかつて豪語していた私は遂にクーラー、扇風機とピック&ロール。

暑さに輪をかけたのがバスケットボールのバリ五輪、福岡インターハイ、新潟全中、ミニバスチビッ子大会、そして数回のバスケットクリニック。心身共に熱く、熱く燃えた。燃えない人を誰が囲もうか。本物の軽い熱中症になってしまい、何回も足をつってしまった。

散歩コースの田んぼには金色に稲穂が色づいている。歩きながら「実るほど頭を垂れる稲穂かな」が頭をよぎる。私はまだまだ頭を垂れるだけ実っていないことを気づかされた。

1・テレビから

◆「さりとての努力。無駄に思えるような小さな努力の積み重ねをバカにしてはいけない」
〈『英雄たちの選択・昭和の選択 戦争なき世界へ 国際司法の長・安達峰一郎の葛藤』NHKBS〉：番組の司会をしていた歴史学者磯田道史の言葉である。ダメだと思うけどやってみるという気持ちがあって初めて可能性が出てくる。その気になった人間だけが、常識では破れないとされているものを破ることができる。

2・読書から

◆「ボールは無限の空間を飛び、選手達は無限の可能性を秘めて汗を流す。それらを毎日毎日見ていられることは、何と幸せなことだろう」〈『高い目 低い手』小島孝治著：アポロン企画〉：伝説のバレーボール名将の言葉。今こんな想いを抱いている指導者は何人いるのか。

3・新聞から

◆「65mじゃまだ満足できない。頑張る理由ができてホッとしている。満足できない理由があるのは幸せなこと」〈朝日：スポーツ〉：女子やり投げ北口榛花は自らが目指した「真の世界女王」になった。しかし「なりうる最高の自分」にはまだまだだという。恐るべし。

◆「待っておれ。それは必ず来る。遅くなるかもしれないが、待っておれ」〈朝日：惜別〉：ピアニストのフジコ・ヘミングが60台後半に聖書の中で目にした言葉。その後演奏だけでなく生き方も支持される超遅咲きのカリスマが誕生する。私ももう少し待ってみよう。

◆「平和は人類共有の世界遺産である」〈朝日：長崎平和記念式典〉：戦後79年長崎原爆の日に読み上げた被爆者代表のメッセージ。今まで戦争を経験しないで70年生きて来た。最近「新しい戦前」という言葉があちこちでささやかれる。1939年俳人の渡辺白泉が「戦争が廊下の奥に立っていた」という句を残した。戦いはスポーツと自分との戦いで十分。

◆「一番の失敗は、失敗することを恐れることだと思っています」〈朝日：折々のことば：草薨剛〉：昔から偉人達が語っている「失敗は成功の元」。シュートの6～7割は失敗。しかし打ち続けないと入らない。ここぞという時の1本は数多くのシュートミスから生まれる。